

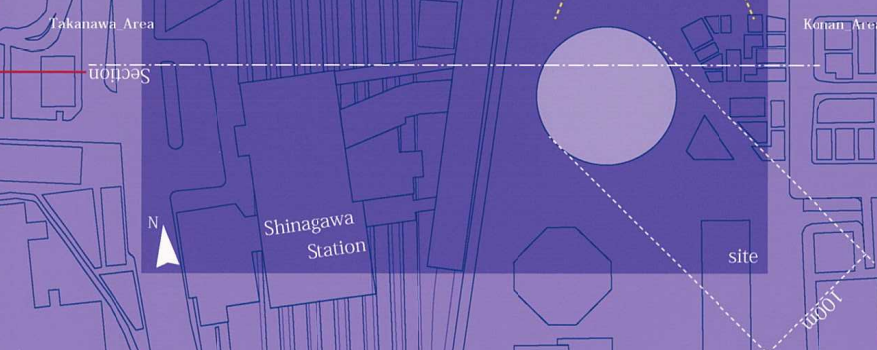
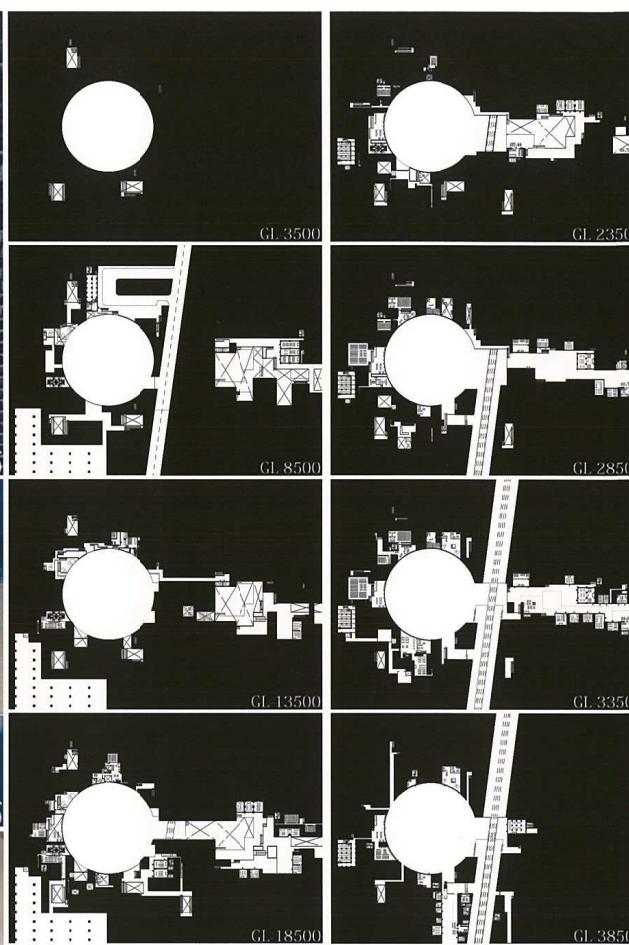
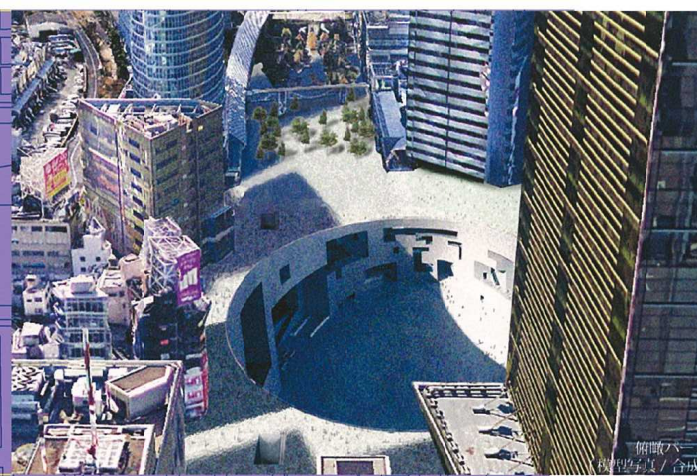
品川駅改造計画 ~都市を異化する~

Concept

異化

ロシアフォルムリズムにおける文学・芸術の概念である。対象を奇妙な形に歪めることで、それ本来のイメージを浮かび上がらせようという逆説的手法である。

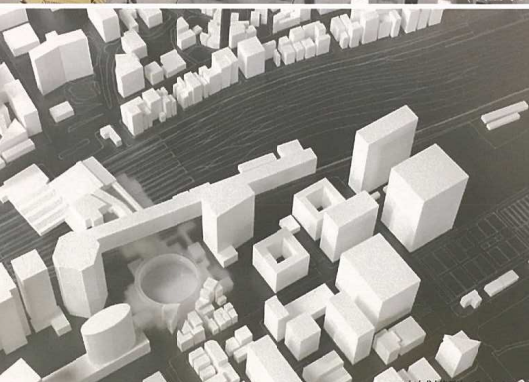
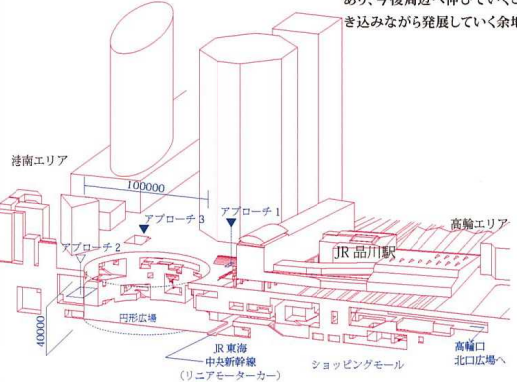
都市に積極的に関与する建築を設計する。建築を置く行為は少なからず周囲へ何か影響してしまう。この影響をポジティブに捉えることで、建築による都市の設計が可能なのではないかと考えた。従って建築を設計する際に、コンテキストを生成することに傾注する。また、現状のコンテキストに対しコントラストとなる建築を提案することで、周辺都市を逆説的に浮かび上げさせ、周囲を含め新しい都市へと飛躍することを意図する。これを建築による都市の異化作用とし、コンテキストとコントラストを生成することがここでいう建築の目的となる。



(設計概要)
品川駅前に深さ40mの巨大な穴を開ける。40mというのは、品川に実際に計画されているリニアモーターカーの駅が建設される深さである。本提案は実際の品川駅及び駅周辺の再開発計画の延長上、あるいはパラレルな案として提案する。穴は100mの正円形で、そこは巨大な円形広場である。穴の立面には、地中に計画している多様な都市的プログラムが断面となって映し出され、垂直な都市の様相となる。穴は品川での都市の異化作用として挿入しているが、同時に鉄道によって分断された東西を繋ぐ連絡通路であり、品川駅のリニアモーターカーへの接続動線としても機能する。

(プログラム)
リニアモーターカーの駅を軸として、そこに付随する施設の計画を検討した。品川駅周辺は複合都市としての特徴を強めていくような開発が行われているのに対して、観光と商業の印象が薄く、人々にとって単なる乗り換え駅、または宿泊拠点となってしまう。そこで、商業施設として、前述の東西連絡部分をショッピングモールとして計画した。また、穴の北側と東側には文化系プログラムとして、美術館と図書館をそれぞれ配している。さらに、南側には二つの大型オフィスとバスターミナルを計画している。これにより、将来の品川への企業の進出、労働者数の増加に対応している。これらの地下計画は、ある意味で未完であり、今後周辺へ伸びていくこと、既成の地上の都市を巻き込みながら発展していく余地を残して計画している。

(造形/空間)
地中であることから、完全に内法面の設計である。地上の外形のある建築とは違いヴォイドの造形だけで全体を設計することとなる。巨大な円形広場の空白感と複雑な動きの高密度な造形のコントラストを与えた。空間は地下に位置する第二の都市と位置づけ設計した。シートエンスと共に変化する都市的なノイズに溢れる空間でありながら、美しい美術館の中のような造形の空間でもある。地上では、ビル群の中で巨大な穴が唐突に口を開け、その風景はどこかシュルレアリスム的とも言えるかもしれない。造形によって都市に今までにない風景を作り出し、さらにプログラムによって周囲を巻き込むこの建築は、品川における新しい強力なコンテキストそのものとなり、品川を次の都市へと飛躍させる。



武蔵野美術大学 造形学部建築学科 卒業設計ポートフォリオ

武蔵野美術大学大学院 造形研究科 デザイン専攻 建築コース M1

山田 陽平